

暑中、お見舞い申し上げます。夏になって列島各地で線状降水帯の発生が見られ、被害の出ているところもあります。用語解説を見ると線状の幅は20~50km程度とのこと。雨は農業や我々の生活に欠かせないもので、雨が降らずに取水制限をしている地域もあるようです。線状と言わず、せめて带状ぐらいで各地に適度に降ってもらえないでしょうかと思います。

▼流水開けの3月上旬から始まった管内のけがに漁業もすでに終漁しているところがほとんどかと思えます。6月中旬から実施しておりました管内のケガニ密度調査の結果（速報）がまとまり、網走水試のHPに掲載しています。それによりますと来年度に脱皮成長して漁獲対象となる甲長7cm以上の雄の資源量指数は、前年の0.50倍に減少しています。この減少傾向は平成26年度から4年連続となりました。ただし、平成31年度以降に漁獲対象となる甲長7cm未満の雄の資源量指数は前年の2.35倍に増加し、4年連続した大幅な減少に回復の兆しが見えて来ています。稚内水試による宗谷総合振興局管内の調査では、甲長7cm以上の雄の資源量指数は前年の1.1倍と前年並み、甲長7cm未満の雄の資源量指数は昭和61年以降で最も少なかった前年に比べると16.9倍に増加し、こちらでも回復の兆しが見られているようです。

▼昨年10月のミニレターNo.55において、オホーツク総合振興局管内の1985年から30年間の魚種別漁獲量の経年変化について書きましたが、今回そのデータをもとに魚種毎に30年間の漁獲量の変動係数（標準偏差/平均値）を求めてみました。変動係数を求めることにより漁獲量の多い少ないに係わらず魚種毎に漁獲量の変動の大きさをある程度比較することができます。ミニレターNo.55で示した60魚種のうち毎年のデータがそろっている40魚種で計算した結果、ケガニが0.18で最も小さく、次いでホッコイエビ0.19、ホタテガイ0.22となりました。これらの魚種では長年にわたって資源管理などがしっかり行われているために、年々の漁獲量の変動が小さく抑えられているものと考えます。ちなみに60魚種すべてを合計した漁獲量の変動係数は0.11で最も小さく、年によって多く漁獲される魚種と少ない魚種のばらつきが打ち消されあって小さな変動係数になっているものと考えられます。

▼網走水試加工利用部では昨年度、非破壊分析によるケガニの身入りやみそ（肝臓）の脂質含量推定技術の開発に取り組みました。近赤外分光器のセンサーを生鮮ケガニの脚長節部および甲殻部に当てることにより、それぞれ筋肉の水分および肝臓の脂質含量の推定が可能と考えられました。しかし、非破壊分析による身入りの推定までには至りませんでした。測定の結果、脚肉の水分は堅ガニより若ガニに多く、肝臓の脂質含量は若ガニより堅ガニに多い傾向が見られました。ポイル脚肉の官能評価では堅ガニより若ガニの方が「みずみずしい、甘みがある」と好まれる傾向があり、若ガニは堅ガニより水分とグリシンが多いためではないかと推察しています。

（網走水試 上田）